

2014 年度

私立大学図書館協会研究助成
「機関研究」報告書

教職協働で作る学修支援
—ビブリオバトルの手法を活用したグループワークと読書ノートの構築—

2015 年 3 月 31 日

九州国際大学図書館

目 次

第一章	はじめに	
第一節	九州国際大学の概要	2
第二節	九州国際大学図書館の概要	2
第二章	研究活動の目的・背景	3～4
第三章	研究の内容	7
第一節	取り組みまでの準備	7～8
第二節	基本となる実施パターン	8～9
第三節	実施状況	9～14
第四章	アンケートの分析	15～22
第五章	結果	22
第六章	考察	22～23
第七章	おわりに	23～24
	引用・参考文献	25
	関連文献	25～26
	資料一式	
	・ビブリオバトルレジュメシート 1 (資料：1)	
	・ビブリオバトルレジュメシート 2 (資料：2)	
	・原稿作成シート (資料：3)	
	・ビブリオバトル評価シート (資料：4)	
	・一行ホメシート (資料：5)	
	・学生事前アンケート (資料：6)	
	・学生事後アンケート (資料：7)	
	・教員事後アンケート (資料：8)	
	・SA 用記録シート (資料 9)	
	・図書館スタッフ用記録シート (資料 10)	
	・ミニッツペーパー (資料：11)	
	・発表分析カード (資料：12)	
	・教員事後アンケート結果 (資料：13)	
	・読書ノート (資料：14)	

第一章 はじめに

■ 第一節 九州国際大学の概要

九州国際大学は、昭和5（1930）年に北九州の勤労青年のために開設された夜学の「九州法学校」を前身としており、「本校ハ単ニ法律及ビ経済ノ知識ヲ授ケルバカリデナク、塾的精神ニ依リ、相互ニ心的鍛錬ヲナシ、以テ誠実有為ナル人材ヲ養成スル」を建学の精神としている。昭和5（1930）年の学園の創立以来、36,000人以上の卒業生を地域社会に送り出してきた。現在、本学園は、九州国際大学大学院、九州国際大学、付属高等学校及び付属中学校を設置し、地域社会貢献、国際交流、生涯学習事業等を図り、地域社会から評価される「開かれた学園づくり」に邁進している。

また、本学は「教育基本法及び学校教育法に則り、個性の伸長と人格の完成を旨とし、法律学、経済学、経営学、国際関係学に関する専門的知識を教授し、北九州の地域に立脚し、国際的視野を持った理論・実践両面に明るい人材を養成すること」（九州国際大学学則第1条第1項）と定め、本学教育の基本理念、使命・目的としている。学生一人ひとりを一から育てる大学として、少人数教育に力を入れている。

■ 第二章 九州国際大学図書館の概要

九州国際大学図書館はメディアセンターと称される5階層の建物のうち2階から5階部分が該当している。館内には個人ブースやグループ学習ができる学習室、身体障がい者席や研究者用の個室を設け、全体で333席配置している。蔵書数は平成27年3月31日時点で和書約37万4千冊、洋書約8万8千冊となっている。

「大学図書館の整備について(審議まとめ)-変革する大学にあって求められる大学図書館像-」にもあるように、図書館の役割と機能も変化し、従来の枠組みに捉われない多様性が求められるようになってきている。また、少人数教育に力を入れている本学だからこそできる図書館活用法や、細やかなサービスを徹底し、図書館の活性化に日々取り組んでいる。具体的には、館内レイアウトの見直しを行い、学部のコース・学科に関連したコーナー、就職・キャリア支援コーナー、展示コーナー等を学生の導線を考慮し、一フロアに集約し、ラーニング・コモンズの設置も行った。学生の図書館利用を推進する活動としては、入門セミナー（1年生）のクラスで授業と連携して図書館ガイダンスを実施しており、蔵書検索等図書館の利用方法を指導している。平成26年度は28クラス中27クラスが受講した。その他選書ツアーの実施や展示企画を学生に任せることで、学生の視点で選書や蔵書の紹介を行っている。また、展示に関わる学生には企画や広報も分担し、社会人基礎力の一部（「前に踏み出す力」や「チームで働く力」）の育成を目指している。新しい試みとして平成25年度から学生の読書への関心を高めるべくビブリオバトル（書評のプレゼンテーション）を実施している。対外的には北九州市内の公共図書館と連携し一般開放している。本学の専門分野の資料や閲覧スペースを本学図書館が一般市民に提供することで地域への貢献にも繋がっている。

■第二章 研究活動の目的・背景

本学図書館では、平成 25 年度からビブリオバトルに取り組んでいる。ビブリオバトルとは「本を通して人を知る、人を通して本を知る」がコンセプトの一つであり、公式ルールは以下の 4 項目である。

- (1) 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
 - (2) 順番に一人 5 分間で本を紹介する。
 - (3) それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを 2～3 分行う。
 - (4) 全ての発表が終了した後に「どの本が読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員 1 票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。
- (ビブリオバトル普及委員会編著(2013)『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会)

平成 26 年度の研究活動の背景として、平成 25 年度の取り組みとそこから浮き彫りになった課題について説明する。

本学は前述のとおり少人数教育を掲げており、授業の一環（特にゼミ単位）として取り入れることも視野に入れ、どのようなアプローチがスムーズなのか検討を重ねた。まずは、図書館長、図書館スタッフ、図書館 SA(Student Assistant)有志で練習会を行い、1 年生が履修する「入門セミナー（ゼミ）」における図書館ガイダンスの案内と同時に、ビブリオバトルという新しい取り組みの導入案を一緒に提案した。数名の教員から反応があり、図書館ガイダンスとの連動を持たせるためミーティングを実施した。また、実際にどんなものか体験してもらうため、図書館長や図書館スタッフ、学生スタッフが授業内でビブリオバトルのデモンストレーションを行った。1 年生ゼミで 4 クラス、2 年生ゼミで 1 クラス、教職課程（司書教諭科目）クラスで実施した。デモンストレーション、本の探し方、ワークシート（九州国際大学図書館作成）（資料 1、2）の作成、グループ内の練習等のプロセスを経て、ビブリオバトルにチャレンジした。観覧者としてゼミ担当外の先生方にも参加してもらった。また、参加者に一行ホメシート（資料 5）を記入してもらい、能動的な参加を促すような仕組みを持たせた。



ワークシートを使ったグループワークの様子。教員と連携し、図書館スタッフが授業支援を行っている。
ワークシートでは簡単な書誌事項や感想を記入する欄がある。
文献を引用する際に役立つように解説をしている。



ビブリオバトル後の講評の様子。観覧には学部の垣根を越え、他学部の教員も参加している。また、近隣公共図書館長も参加し、地域との連携も行っている。

オープンキャンパスの企画の一つとして学生主体でビブリオバトルを企画し、来場した高校生や保護者の方にチャンプ本を選んでもらった。さらに、地域活性化のイベントとして、近隣の公共図書館や地域づくり団体と協力して開催した。(後に別のイベントや市内の公共図書館でのビブリオバトル初開催へとつながった。)



オープンキャンパスの様子。企画、運営を学生が行った。来場した高校生が翌年入学して、「ビブリオバトルをやってみたい」という声もあった。



地域活性化イベント「黒崎ブックビューフェ」での開催。
地域で活躍する大人チームと本学学生チームが対決した。

また、新聞で本学のゼミにおけるビブリオバトルの活用が紹介されるなど、大学広報の一助になった。さらに本学経済学部初年次教育研究会において、図書館スタッフが事例報告するなど、学内におけるビブリオバトルの認知度は向上した。しかし図書館が行う学修支援、教職協働で行う授業デザインの構築という新たな課題が生まれた。平成25年度の取り組みから生まれた新たな課題に取り組むため、私立大学図書館協会へ研究助成の申請を行った。

■第三章 研究の内容

前述の研究活動の背景でも述べたとおり、本学図書館では入門セミナー（1年生が履修するゼミ）で図書館ガイダンスを実施している。また、少人数教育に力を入れており、2年次以降のゼミ活動でもビブリオバトルを実施しやすく、さらに、教職課程（司書教諭科目）、図書館学課程があり、担当教員の協力が得られるという環境があった。このような環境を生かし、教職協働の学修支援および図書館スタッフによる授業支援と、その効果測定の2つを研究の目的とした。

始めに、基本となる実施パターンを作成し、実施クラスの担当教員向けに説明会を開催した。説明会の意見を反映し、基本となる実施パターンをクラスごとにカスタマイズした。2013年度の取り組みにおいては、本学図書館作成の「ワークシート」（資料2）を使用した。本研究活動においては、思考プロセスの可視化、論理的な説明を主な目的として、本学教員が作成した「原稿作成シート」（資料3）を併用した。ビブリオバトルの公式ルールでは、レジュメなどの使用は禁止とされている。そのため、ワークシートや原稿作成シートはあらずじや感想をまとめるためのツールとして位置づけ、発表をする際は公式ルールの徹底を行った。

本研究の効果を測るため、第1回目（デモンストレーション）では事前アンケートを記入、第5回目で事後アンケートを記入してもらい、ビブリオバトルの事前事後で学生の意識の変化を測った。また、毎回ビブリオバトルミニッツペーパー（資料11）を記入してもらい、次回でフィードバックを行った。

第一節 取り組みまでの準備

・SD研修

ビブリオバトルを使ったワークでは、図書館職員が進行役を務めた。また、学生が発表準備をする際には、教員、図書館スタッフ、図書館SAがアドバイスをした。年度初めにワークを開始したクラスは、2013年度にワークを経験したスタッフ2名が進行役を担当し、その他のスタッフに随時見学に入ってもらった。その後、クラスごとに担当を割り振って実際に授業に入りながら、図書館内で研修を行った。

以下、研修の内容を簡単に紹介する。

第1回(5/23)：図書館スタッフ同士でビブリオバトル

話したいことを頭の中でまとめ、ワークシートに落とし込むのにどれくらい時間がかかったか、発表内容をまとめるのにどのような方法をとったかなど、各々の経験を共有した。

第2回(5/27)：ビブリオバトル公式ルール、本学での導入目的の確認

目的：学生の自発的な学修を促す。読書習慣、表現力、思考プロセスを身につける。本学の学生は本を読む習慣がない学生が多く、表現力も乏しい。そこを育て

るための導入としてビブリオバトルを使う。動機づけ、きっかけづくりとする。

第3回(5/30)：前回振り返り、クラス担当決め

第4回(6/3)：スタッフ同士で意見交換

ビブリオバトルワークに入ってみて、原稿作成シートの使い方や記入の支援に関する疑問点などを付箋紙に書き出し、内容別に振り分けた。

第5回(6/5)：教員を招いて意見交換

ビブリオバトル発表準備段階の学生支援について、教員からアドバイスをもらった。

第二節 基本となる実施パターン

○1回目

- ・デモンストレーション(30分～40分)

内容：担当教員、図書館スタッフ、SAのデモンストレーションを観る。

ねらい：ビブリオバトルはどんなものかを知る。ビブリオバトルを理解する。

- ・本探し(30分)

内容：図書館ガイダンスの復習、パソコンを使って本探し。

ねらい：本を探すことができるようになる。読みたい本や紹介できる本を見つける。

○2回目

- ・レジュメシートの作成(40分)

内容：紹介する本の説明を書く。

ねらい：本の情報を整理する。自分の考えをまとめる。奥付の情報や引用ルールを理解する。

- ・グループワーク①(30分)

内容：グループの中で3分間話す。

ねらい：少人数の前で話すことに慣れる。本のタイトルや著者、選んだ理由などを話す。

○3回目

- ・グループワーク②-1(40分)

内容：グループの中で5分間話す。

ねらい：5分の時間感覚をつかむ。ビブリオバトルの練習、人の発表を聞いて良い点、改善点を指摘する。

- ・グループワーク②-2(30分)

内容：グループメンバーをシャッフルする。

ねらい：グループで紹介された本や著者の情報を伝える。人の発表で良かった点を共有する。人の発表で良かった点を自分の発表に活かす。

○4回目

- ・ビブリオバトル本番①(70分)

内容：公式ルールに沿った形で本の紹介をする。紹介5分+質問2分×発表人数
ねらい：取り組みの成果を表現する。人に伝える工夫ができるようになる。

○5回目

・ビブリオバトル本番②(70分)

内容：公式ルールに沿った形で本の紹介をする。紹介5分+質問2分×発表人数
ねらい：取り組みの成果を表現する。人に伝える工夫ができるようになる。

※毎回実施すること：ビブリオバトルミニツペーパー（資料11）の記入（授業終了10分前）

※1、5回目ですること：事前、事後アンケート（資料6、7）の記入（授業終了10分前）

第三節 実施状況



（図書館ガイダンスの風景 国際関係学部入門セミナー：研究モデルクラス 松井ゼミ

1年生の必修科目である入門セミナー（ゼミ）において、図書館ガイダンスを実施している。ビブリオバトルを実施するクラスはガイダンスと連動させている。館内ツアーと本・雑誌探しのあと、担当教員、ゼミ SA、図書館スタッフによるデモンストレーションを実施した。ゼミに関係する教職員がデモンストレーションを実施することで、ビブリオバトルをより身近に感じてもらうことも狙いの一つである。



ゼミ担当教員とゼミSA（2年生）によるデモンストレーション。



ゼミの様子：図書館SAが原稿作成シートをレクチャーしている。



ゼミの様子：教員が原稿作成シートをレクチャーしている。



(法学部入門セミナー：研究モデルクラス 藤ゼミ)

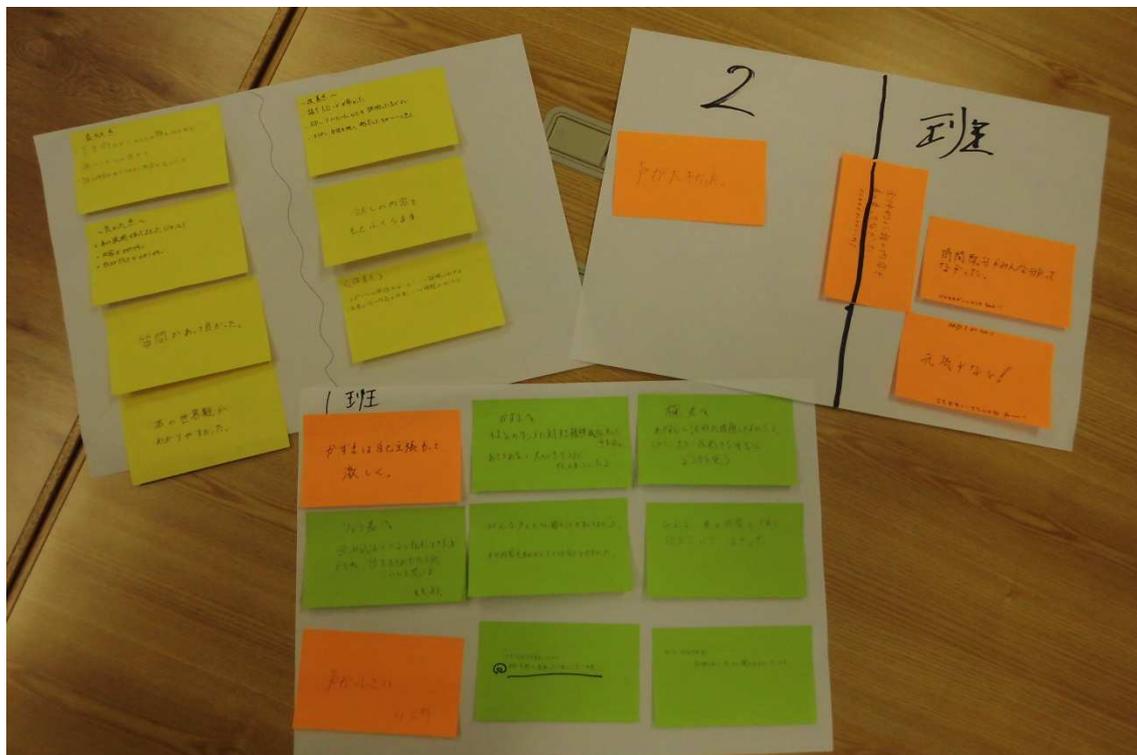
原稿作成シート（資料 3）やレジュメシート（資料 1、2）を使って考えをまとめている。グループ内で3分間の発表練習をしている。ゼミSAはビブリオバトルの経験者であり、1年生に自分の経験を伝えることでSAの成長にもつながっている。



図書館スタッフによる授業支援風景



グループ内練習の後、「発表分析カード」(資料 12) を使ってグループでディスカッションを行った。発表分析カードはコピーして教員にフィードバックしている。



発表分析カードとグループディスカッションから良かった点、改善点を出し合った。



ゼミ内ビブリオバトルの様子 経済学部入門セミナー：研究モデルクラス 宇都宮ゼミ



ビブリオバトルから図書館の仕事に興味を持ち、現在図書館S Aとして活躍。

第四章 アンケートの分析

ビブリオバトルを使ったワークに参加した学生に対して、ワークの前後でアンケートを実施した。(資料 6、7)

ワークの参加者数は 255 名であり、その内 157 名から事前・事後アンケートの回答を得られた。

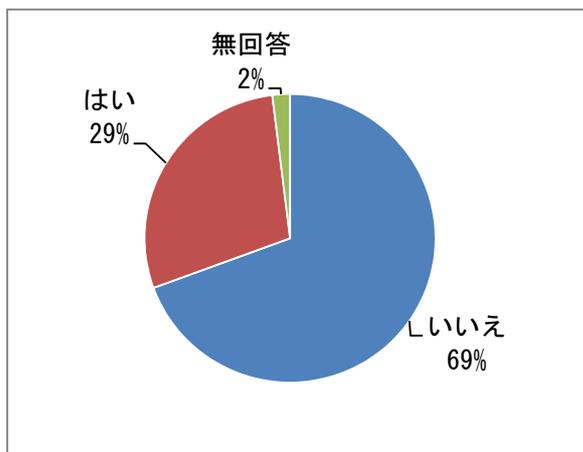


図 1. ビブリオバトルを知っていますか

図 1 はビブリオバトルを使ったワークに参加した学生がビブリオバトルを知っているかどうかを調査した結果である。69%の学生がビブリオバトルを知らなかったことから、ワークの第 1 回目で説明だけでなく、デモンストレーションを行う必要があると考える。

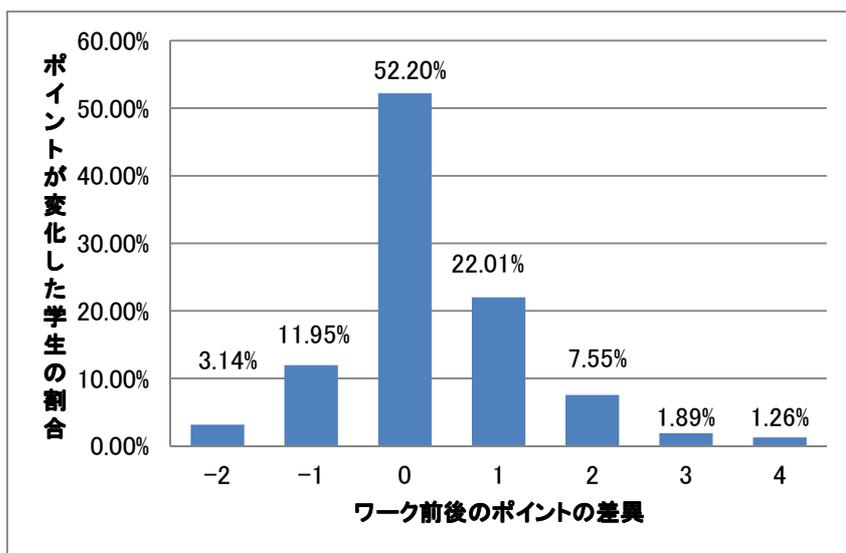


図 2. ビブリオバトルを使ったワークの実施前後で「本を読むことが好き」という意識に変化があったか

図 2 はビブリオバトルを使ったワークを通して「本を読むことが好き」という意識に変化が生じるかどうかを測った結果である。ポイントが上昇した学生は 32%、ポイントが下降した学生は 15%いた。

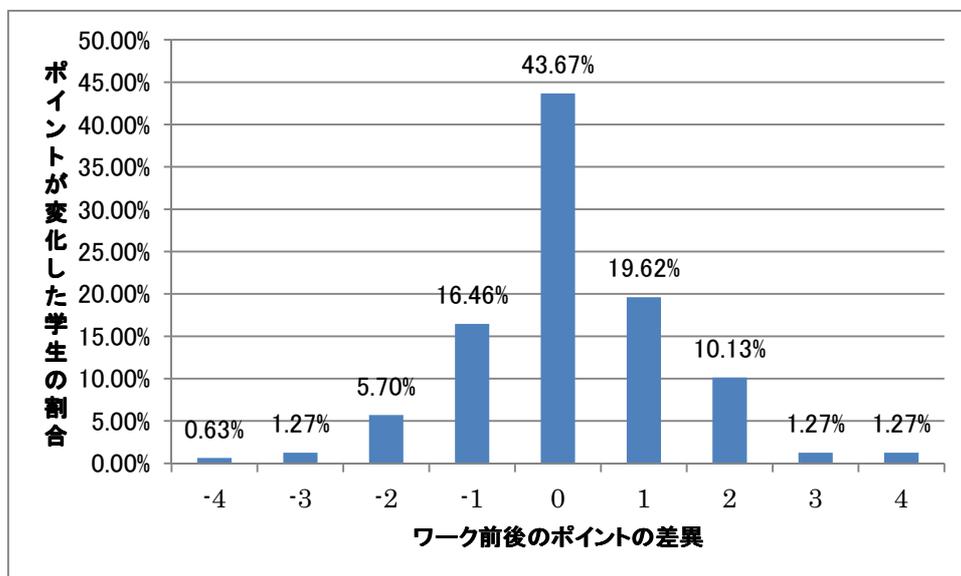


図 3. ビブリオバトルを使ったワークの実施前後で「人前で話すことに抵抗がない」という意識に変化があったか

図 3 はビブリオバトルを使ったワークを通して「人前で話すことに抵抗がない」という意識に変化が生じるかどうかを測った結果である。ポイントが上昇した学生は 32%、ポイントが下降した学生は 24%いた。

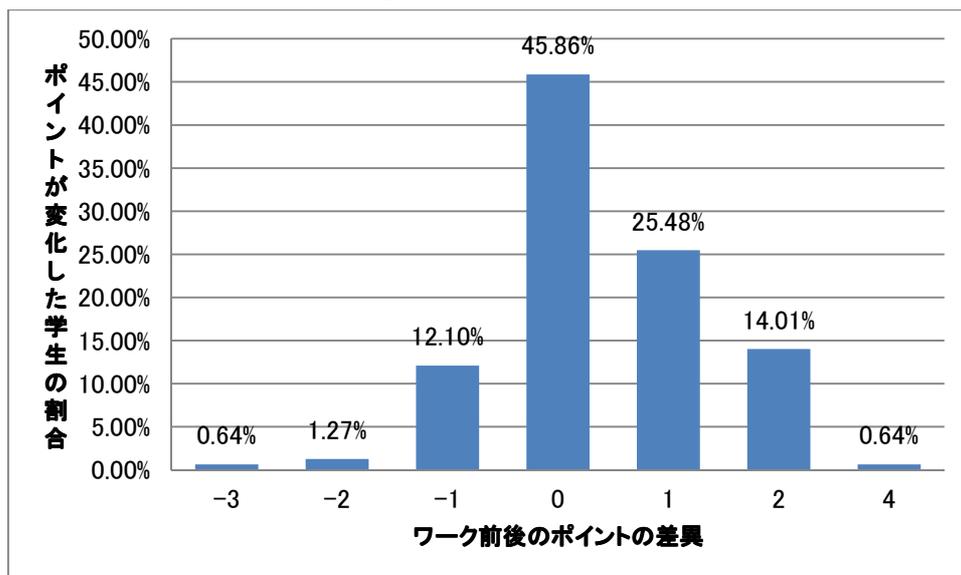


図 4. ビブリオバトルを使ったワークの実施前後で「文章を書くことが好き」という意識に変化があったか

図 4 はビブリオバトルを使ったワークを通して「文章を書くことが好き」という意識に変化が生じるかどうかを測った結果である。ポイントが上昇した学生は 40%、ポイントが下降した学生は 14%いた。

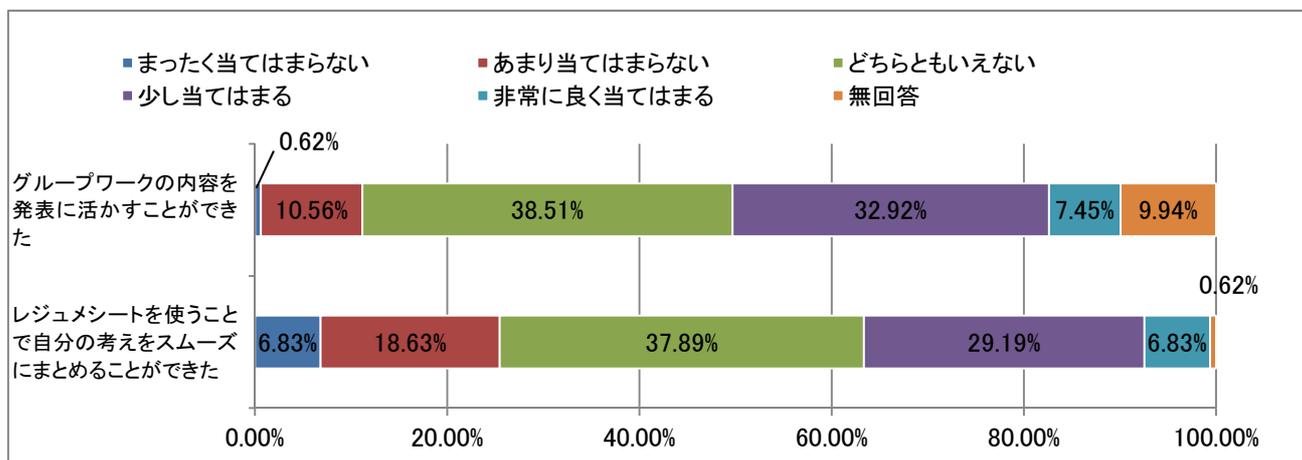


図 5. 準備したワークやツールは役に立ったか

図 5 は準備したワークやツールが学生にとって役に立ったかどうかを聞いた結果である。「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」を合計するとグループワークについては 40%、レジュメシート(資料 1、2)については 36%の学生が役に立ったと感じたことがわかった。もっと多くの学生に役立ったと実感してもらえるように改良が必要である。書く作業に関してはミニツツペーパーにも「難しい」という感想が書かれており、学生が本の内容をまとめたり、発表の構成を考えるのを促せるようにシートの内容を改良したり、アドバイスをしっかりしていく必要がある。

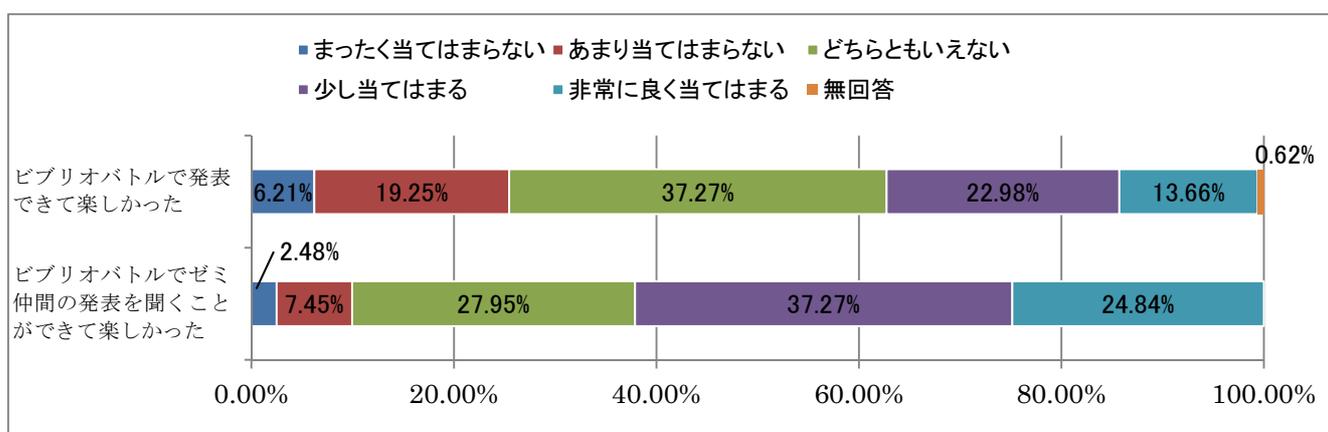


図6. ビブリオバトルを体験して楽しかったか

図 6 はビブリオバトルを体験して楽しかったかどうかを聞いた結果である。「発表できて楽しかった」について「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」を合計すると 36%の学生が楽しかったと回答している。また、「発表を聞くことができて楽しかった」については、「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」を合計すると 62%の学生が「楽しかった」と回答している。この結果より、自分が発表することに関して楽しめた学生は少なかったが、本に関する発表を聞くことに関しては楽しめた学生が半数を超えたことがわかる。

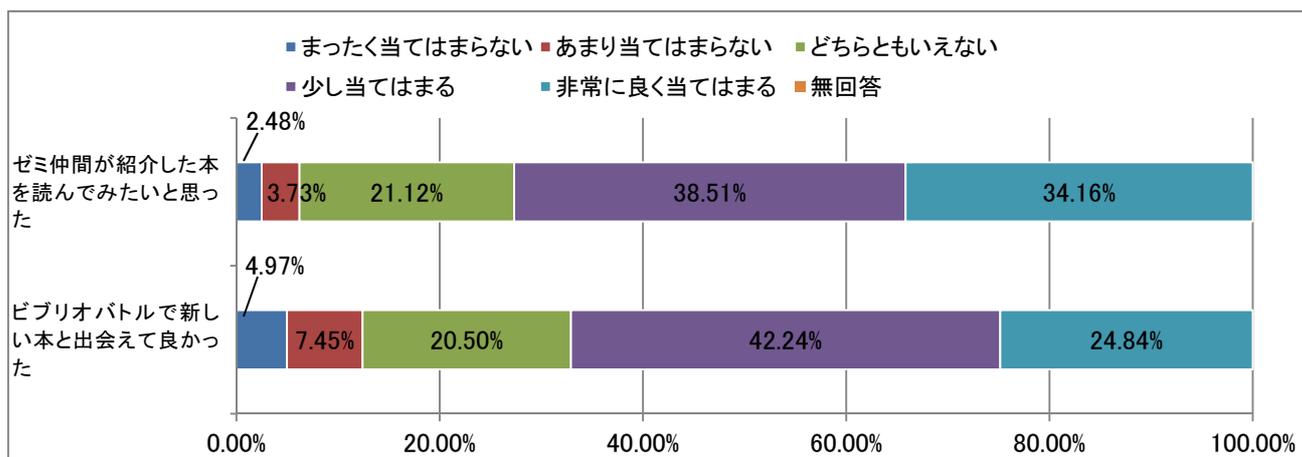


図7. ビブリオバトルで紹介された本を読んでみたいと思ったか

図 7 はビブリオバトルで紹介された本を読んでみたいと思ったかどうかを聞いた結果である。ゼミ仲間が紹介した本を読んでみたいと思った学生は「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」を合計すると、73%が読んでみたいと回答している。また、「ビブリオバトルで新しい本と出会えて良かったか」という設問では 67%の学生が良かったと回答しており、比較的高い割合の学生に対して読書の動機づけを与えることができたと言える。

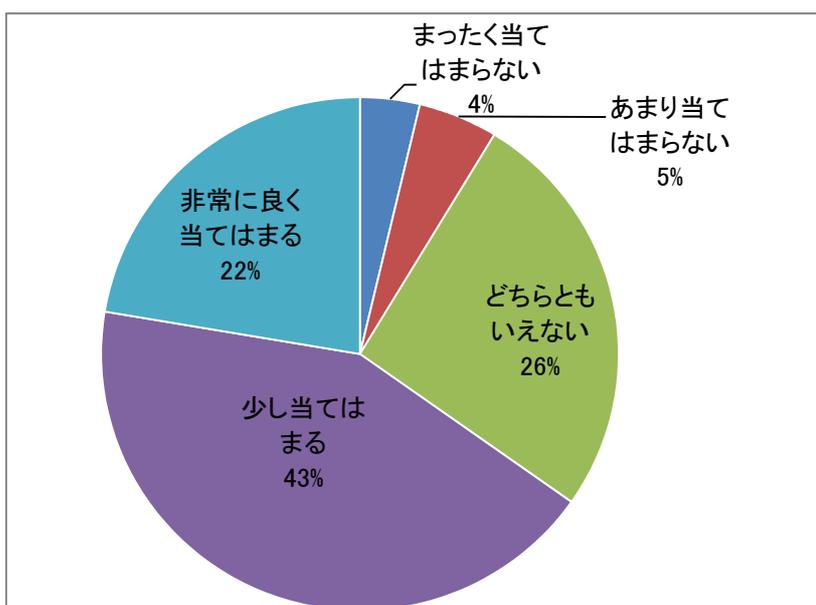


図 8. ビブリオバトルで友達の一面を知ることができた

図 8 はビブリオバトルで友達の一面を知ることができたかどうかを聞いた結果である。「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」を合計すると 65%の学生がビブリオバトルを通して友達の一面を知ることができたと回答している。ビブリオバトルのコンセプトでもある「本をとおして人を知る」が実感された結果となった。1年生の入門セミナー担当教員からは「その後のゼミ活動では、例年よりまとまりがあったように感じた」といった感想もいただいている。

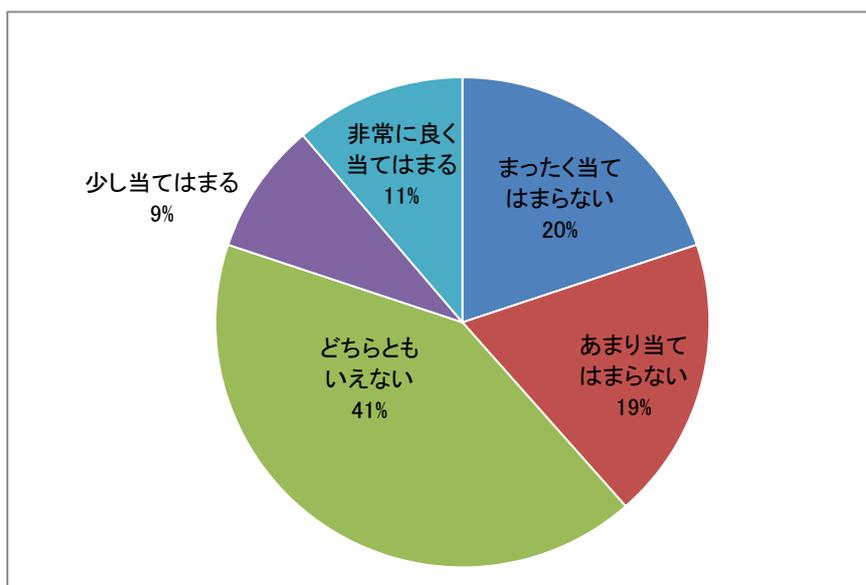


図 9. ビブリオバトルをまたやってみたい

図 9 は、ビブリオバトルをまたやってみたいかどうかを聞いた結果である。図 6 で示したとおり、「発表できて楽しかった」(36%) と回答した学生は少なく、「またやってみたい」(20%)と言った気持ちにつなげることはできなかった。この点については、今後のワークの内容を考えていく上での課題である。

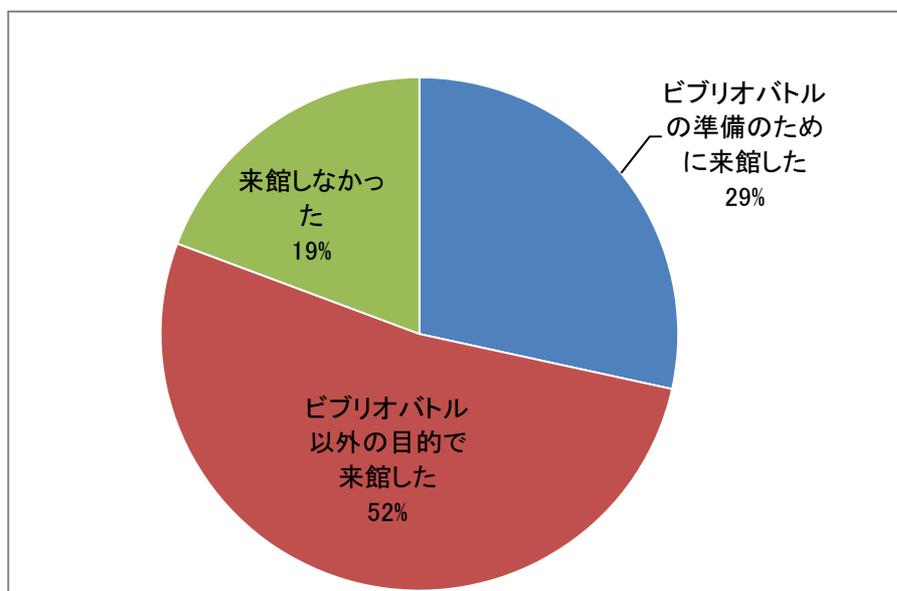


図 10. ビブリオバトルのワークを実施している期間に授業以外で図書館に来たか

図 10 は、ビブリオバトルのワークを実施している期間に授業以外で図書館に来たかを聞いた結果である。ビブリオバトルの準備のために図書館に来館した学生は、29%である。今後の取り組みでビブリオバトルのワーク期間中に学生が図書館に来るようなしかけを検討していきたい。

次に、ビブリオバトルのワークを実施したことによって入館者数や貸出冊数といった図書館の利用に影響があったかを見ていく。

表1. 年度毎の入館者(学内)、貸出冊数(学部生)

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度
学部在籍者数 (前年度比)	1.20%	-0.84%	-3.27%	-5.09%	-7.96%
入館者数(学内) ※2	71,215 人	71,348 人	64,461 人	65,680 人	67,543 人
貸出冊数(学部生)	4,531 冊	4,983 冊	3,723 冊	4,085 冊	3,403 冊

※1.各年度において5月1日現在の在籍数。

※2.入館者数には教職員等が含まれる。

表2. 前年度比<年度毎の入館者(学内)、貸出冊数(学部生)>

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度
学部在籍者数	1.20%	-0.84%	-3.27%	-5.09%	-7.96%
入館者数(学内)	10%	0.2%	-9.7%	1.9%	2.8%
貸出冊数(学部生)	18%	10%	-25%	10%	-17%

表3. 学生 1 人あたりの年間貸出冊数 (単位:冊)

	2012 年度	2013 年度	2014 年度
法学部	1.40	1.23	1.17
経済学部経済学科	0.95	1.26	1.28
経済学部経営学科	1.51	1.79	1.24
国際関係学部	3.73	4.49	3.87
学部生平均	1.78	1.99	1.80

※学部・学科別の貸出冊数は 2012 年度からデータをとっている。

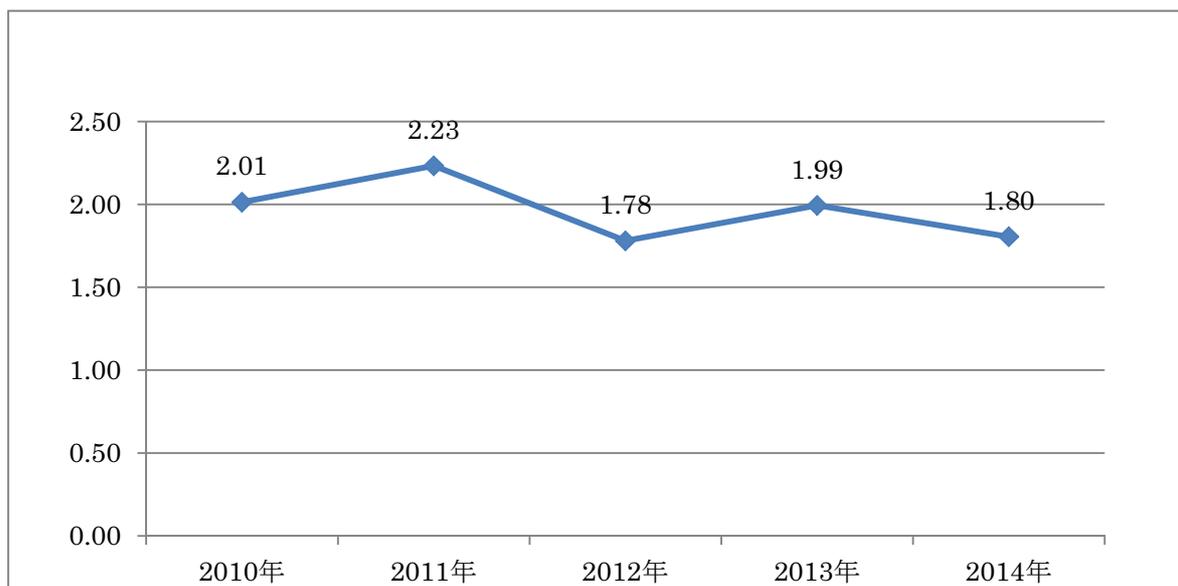


図 11. 学生 1 人あたりの年間貸出冊数

(表 1) (表 2) より、学部在籍者数は減少傾向にあるが、入館者数については 2013 年度、2014 年度に増加となった。貸出冊数は 2012 年度に減少したが、ビブリオバトルに取り組み始めた 2013 年度には増加した。しかし、2014 年度は再び減少となった。学生 1 人あたりの貸出冊数 (表 3) (図 4) を出してみたが、やはり減少している。

図 7 では、ビブリオバトルでゼミ仲間が紹介した本を読みたい、といった読書への動機

づけが行われたことがわかったが、本の貸出といった行動に結びついていない。ビブリオバトルで紹介される本を事前に準備して、発表終了後すぐに本が貸出できるようにするなど、ビブリオバトルと本の貸出を結びつけ、学生の読みたい気持ちが持続しているうちに本を手にとってもらえて、継続させるような工夫が今後の課題である。

■第五章 結果

第1回目のデモンストレーションでは学生からの質問はほとんどなかった。教員や図書館スタッフ、図書館 SA などが積極的に質問することで、質問の視点の例示を行った。本探しでは、普段本を読まない学生は本を選ぶことが困難であった。学生に興味のあることを聞き、図書館内の展示コーナーなどを紹介した。読書の宿題を出す際は、一日何ページか決めてコツコツ読む、発表本番前までに読み終われば良い、など学生にアドバイスをした。レジュメシート、原稿シートの作成については、学生だけでなく指導者側も迷うことがあった。作成した教員と情報交換や研修を行い、図書館スタッフ、図書館 SA の指導力向上に役立てた（前述の SD 研修参照）。グループ内の練習で話せたのは平均して2分10秒程度であった（計測したゼミ）。昨年ビブリオバトルを経験した学生から「頭の中で考えることと書く・話すことは違う」という感想があった。グループワークでは書誌情報の確認や本の情報を整理させたが、学生の反応は「発表は3分でも長い。考えをまとめるのは難しい。」といったネガティブなものであった。原稿作成シートがあまり書けていない学生に対しては、図書館スタッフ、図書館 SA がインタビューを行い、インタビューのやり取りを書かせるという手法をとった。グループワークの前に傾聴力に関するプリントを配付して、グループワークの活性化につなげた。「発表分析カード」（資料12）はお互いの発表をよく聴いて、良い点、改善点を指摘し合っていた。また、発表分析カードで学生が重要だと感じたのは、【発表の態度：自信を持って話す・下を向かず、元気よく・ゆっくり話す】といったことだった（ビブリオバトル評価シート参照）（資料4）。実施パターンで計画していたグループメンバーのシャッフルは時間が足りず、実施できなかった。

■第六章 考察

教員事後アンケート結果から（資料13）、ビブリオバトルを実施することによって期待していた効果は（設問1）、「読書の楽しさを知る」、「要約力がつく」、「客観的に説明する能力がつく」、「プレゼンテーション能力が向上する」が多かった。記述欄では自分の内面の向上や、他者と協力して課題に取り組むことかできる、という回答があった。ビブリオバトルを実施した後に感じた効果としては（設問2）、「読書の楽しさを知る」、「要約力がつく」よりも、「自分が感じたことを客観的に説明する力がつく」、「プレゼンテーション能力が向上する」、「学生同士のコミュニケーションを図ることができる」の方が多かった。このことから、実施前と実施後では教員の評価が異なることが分かった。また記述欄では、学生に対する評価がプラスに変化したコメントや本の内容にある背景、といった回答があった。

ビブリオバトルを実施した後に感じた最も効果があったこと（設問 3）では「要約力がつく」が一番多かった。教員事後アンケートの感想（記述部分）では、ビブリオバトルの実施や図書館が行う学修支援に関して、概ね好意的なコメントが多かった。しかし、本研究活動が特定の教員の協力や学部に限ったため、全学的な位置づけを明確にする必要があると感じた。図書館のさらなる活用（ラーニング・コモンズ）や、授業連携については、教務部門と学部事務を統括する教務部長（教員の役職者）を通して働きかけを行っているところである。本研究活動は、ゼミ活動として授業の一環で実施したので、成績評価との関係がある。数名の教員は成果物（ワークシート等）の内容や発表への取り組みを成績評価としていた。成績評価に関しては図書館が行う学修支援がどこまで関与していくか、グループワークを含めたビブリオバトルの実施がどう影響していくのか、指標となるものも必要であろう。また、学生が回答した「事前・事後アンケート」、「ミニッツペーパー」から教育効果の数値化や客観的指標を導き出したい。

読書が習慣化されていない学生にとって、ビブリオバトルを活用したグループワークは難しいものであったと推測される。学生が大学在学中に教養を深め、読書に親しむことができるようなツールの開発も行った。そのツールは「読書ノート」（資料 14）と称し、レベル 1 からレベル 10 までを設定し、自己評価や達成記録が可視化できるようにした。また、教員等のコメント記入欄も設けて、学生とのコミュニケーションが図れるように構築した。さらに、有識者（直方市立図書館館長 野口和夫氏）を招き、朗読会（2 回）を開催し、相手に気持ちを伝える方法や読書の広がりや学びを学んでもらった。これからも情報リテラシー教育の一環として、図書館ガイダンスと連動させながら、授業連携を図りたい。平成 27 年度以降も継続して取り組み、学生の自発的な学びにつなげるきっかけとなるよう、さらなる研究をしていくことが必要である。

■第七章 おわりに

2013 年の 3 月に図書館長である島浦一博教授の「ビブリオバトルをやってみたいんだよね」の一言から、本学図書館におけるビブリオバトルはスタートした。我々を温かく見守ってくださり、本学の多数の先生方がゼミで取り組んでいただきました。1 年間の実践を無駄にすることなく、私立大学図書館協会の 2014 年度研究助成「機関研究」に採択いただいたことは本学図書館にとって大変な幸運であり、それと同時に大きな挑戦でもあった。限られた時間、スタッフでの研究活動は決して楽なものではなかった。スケジュール管理、予算管理などのマネジメント力も必要であったし、図書館の枠組みから離れて研究活動を考えることや、教育、学習の専門的な知識も必要だと痛感した 1 年でもあった。

高等教育に求められるものは知識習得型の「教育」から、学修によって身につく力を求める「学習成果」へ移行している。我々はビブリオバトルをツールとして、教育の中に図書館を活用した主体的な学びを埋め込むことを検討し、実践してきた。18 歳人口の減少に伴い、大学全体がおかれている状況は厳しいものであり、本学にとっても予算削減や施設

面での制約など恵まれた状況ではない。しかしながら、そのような状況の中でも、歩みを止めることなく、「何か」を生み出すことは可能であると思う。本学のような小規模大学の実践が、同じ悩みを持っている大学図書館の皆様の励みとなり、また、私立大学図書館協会加盟館大学にとって参考になれば幸いである。

謝辞

末筆ながら以下の関係者の皆様方からご指導、ご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます（所属・役職は平成27年3月31日現在です）。

- 1) 私立大学図書館協会（2014年度研究助成「機関研究」）
- 2) 九州大学基幹教育院 山田 政寛准教授
- 3) 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻 合田 美子准教授
- 4) 九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館 副主幹 矢崎 美香氏
- 5) 九州大学附属図書館 eリソースサービス室 eリソースサポート 係長 兵藤 健志氏

- 6) 直方市立図書館 館長 野口 和夫氏 ※朗読による気持ちの伝え方の研修
語り・朗読『宙のサカナ』代表、北九州市民活動サポートセンター専門相談員
- 7) 九州国際大学国際関係学部 松井 貴英教授 ※研究モデルクラス、
原稿作成シート作成、SD研修、読書ノート監修
- 8) 九州国際大学法学部 藤 勝宣教授 ※研究モデルクラス
渡辺 守雄教授 ※研究モデルクラス
- 9) 九州国際大学経済学部 宇都宮 浩司教授 ※研究モデルクラス
- 10) 九州国際大学経済学部 藤 貴子准教授 ※研究モデルクラス
- 11) 愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 村田 晋也講師
(元九州国際大学経済学部 助教) ※研究モデルクラス、SD研修
- 12) 九州国際大学経済学部 安藤 友張教授 ※学部学年混成モデルクラス
(教職課程・図書館学課程)
- 13) 九州国際大学経済学部 山本 雄三助教 ※データ分析、SD研修

引用・参考文献

ビブリオバトル普及委員会編著(2013)『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会

関連文献リスト

大学図書館の整備について(審議のまとめ) 抜粋

ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー【概要】

(平成22年12月 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会)

(3) 大学図書館に求められる機能・役割

① 学習支援及び教育活動への直接の関与

ア. 学習支援

○ 学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、ラーニング・コモンズ、大学図書館職員等によるレファレンスサービス、学習支援が重要。

イ. 教育活動への直接の関与

○ 情報を探索し、分析・評価し、発信するスキルを一層高める情報リテラシー教育は、大学図書館が主体となって取り組むことが求められており、カリキュラム開発や実施を教員と協同して行うだけでなく、図書館職員が教員を兼任するなどして、直接授業を担当することも視野に入れるべき。また、e-Learning への貢献が期待される。

【ビブリオバトル】

粕谷亮美(2014)『ビブリオバトルを楽しもう：ゲームで広がる読書の輪』谷口忠大監修, さ・え・ら書房

副島雄児, 田尾周一郎, 平井康丸 [他] (2013)「本を通して仲間を知る：コアセミナーでの試み」, 『九州大学附属図書館研究開発室年報』, pp.35-44, 九州大学附属図書館研究開発室

谷口忠大(2013)『ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム』(文春新書 901) 文藝春秋

山崎紅 (2012)『求められる人材になるための社会人基礎力講座』日経 BP 社

【プレゼン評価】

遠海友紀, 村上正行, 梅本貴豊 [他] (2014)「自律的な学習を促すことを目指した論証文作成の授業の効果」『日本教育工学会研究報告集』 3, pp.13-20

河野 昭彦, 斉藤 博嗣, 佐々木 大輔, 平澤 一樹, 須田 達, 鶴谷 奈津子 (2013) 「9-215 学生の相互評価によるアクティブラーニング型授業(I): プレゼンテーションの向上を目指す取り組み((04)工学教育の個性化・活性化-III)」工学教育研究講演会講演論文集 平成 25 年度(61), pp.482-483, 公益社団法人日本工学教育協会

東北福祉大学「リエゾンゼミⅠ プレゼンテーション ルーブリック」
<http://www.tf.u.ac.jp/campuslife/pdf/rubric_liaison_presentation.pdf>(参照
2014-10-11)

堀口秀嗣(2001)「プレゼンテーションの視点」,『年会論文集』(17), pp.18-19,日本教育情報学会

森朋子「授業/カリキュラムをデザインする」

<<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fd/seika/proj3/files/101208.pdf>>(国立大学法人島根大学教育開発センター「[2010年12月08日]第1回ランチョンFDを開催しました。」平成21年度文部科学省特別教育研究 学生の学びを中心に据えた教職員ネットワークの構築とFDの組織化～山陰地域のFD拠点化に向けて～ 活動成果 プロジェクト3

<<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fd/seika/index.html#anc-proj3>>(参照
2014-10-11)"

山本恭子, 河野浩之(2010)「学生の相互評価によるプレゼンテーション能力向上」『論文誌 ICT活用教育方法研究』13(1), pp.46-50, 私立大学情報教育協会

【読書ノート】

阿部裕美子(2014)「「続く」読書ノートを目指した取組み(特集 読書ノートのすすめ)」,『学校図書館』(770), pp.26-28,全国学校図書館協議会

植田さゆり (2014)「読書生活・学ぶ力を育む読書ノート：島根県版「読書ノート」の活用(特集 読書ノートのすすめ)」,『学校図書館』(770), pp.19-21,全国学校図書館協議会

羽海野チカイラスト(2012)『読書ノート』(集英社みらい文庫, う-3-1,2) 集英社

川江麻美 (2014)「読書の自覚を促す読書ノート(特集 読書ノートのすすめ)」,『学校図書館』(770), pp.22-24,全国学校図書館協議会

杉本直美 (2014)「自立した読み手を育成するための読書記録：読書生活を記録する「読書ノート」のすすめ(特集 読書ノートのすすめ)」,『学校図書館』(770), pp.14-16,全国学校図書館協議会

杉本直美(2013)『読書生活をひらく「読書ノート」』全国学校図書館協議会

ディスカヴァー(2007)『大人の読書ノート My Book of Books』大人の読書ノート My Book of Books